

入学試験問題訂正

社会科学部

科目	小論文
----	-----

誤	○問題Ⅰ 本文3行目 その人たちが熱中している
---	-----------------------------------



正	○問題Ⅰ 本文3行目 その人たちが <u>が</u> 熱中している
---	---

入学試験問題訂正

社会科学部

科目	小論文
----	-----

誤	○問題Ⅰ 本文9行目 「 アド 」
---	-------------------------



正	○問題Ⅰ 本文9行目 「 アンド 」
---	--------------------------

2018年度 学士入学試験 問題
小論文(社会科学に関する基礎を問う)

早稲田大学社会科学部

次ページ以降の問題Ⅰ(2～3ページ)、問題Ⅱ(4ページ)のうち1問を選び、別紙の解答用紙に論述せよ。

I

以下の文章を読み、下記の設問1および2の指示に従って、解答用紙に論述してください。

日本において富裕者の数が増加し、かつこれらの人の所得や資産がますます増えるなかで、新しい動きが富裕者に起きています。具体的には、ますます所得を増やすにはどうすればよいかということにその人たち熱中していることと、税金として政府から徴収される額をできるだけ減らしたいと努力していることです。これらの現象について説明しておきましょう。

第一に、汗水たらして働かずに、株や債券の資産運用をうまくやって、所得や資産を増やすという風潮が高まっています。良好な資産運用先を求めて、海外の投資先も含めていろいろな資産運用の行動をとっています。「デイトレーダー」というのもその一つの例で、豊富な資金を元手として株や債権の売買を四六時中積極的に行っています。すでに述べた村上ファンドの例も、株の取引をうまくやって巨万の富を得る例として理解できるでしょう。

第二に、アメリカで一時盛んであった「法人成り」が日本でも導入されつつあります。法人税率が下げられたことによって、所得税率が法人税率よりも高くなっています。そこで、会社員のような個人として高い所得税を払うよりも、法人となって自分の会社を作り、自らは社長におさまって、低い法人税率で税金を払う方法を探る人が現れます。この方法が「法人成り」というものです。これは節税対策としてアメリカでよく用いられた方法で、法人数がものすごく増加した理由の一つになっています。日本においても会社・法人の設立が容易になっていますので、多くの人がこの行動に出る余地があり、すでに一部では、そうした傾向が見られます。

第三に、これも節税対策の一つですが、住居を税率の低い海外の国に移して、税金の支払いをできるだけ低く抑制したいという行動が見られます。海外においても、富裕者を誘致したいために、意図的に税金を低くしている国があります。村上ファンドの村上世彰氏は逮捕の直前にシンガポールに本居を移しましたが、これも税逃れ的手段として象徴的な行動と言えます。富裕者の租税回避策は海外逃避のみならず、国内においても様々な手段がビジネスとして提供されていますし、富裕者はそれに応えています。

これらの富裕者の所得や資産をますます増やそうとする行動を、どう評価すればよいのでしょうか。私たちは自由を保障する日本に居住していますので、これらの行動を非難できません。もし法律を犯しているのなら、厳重に処罰されなければなりません。原則においては「個人の自由」と言えます。あるいは、弊害があまりにも目立つようであれば、税制や会社法の改正という政策もありえるでしょう。どのような具体策があるかを議論するには、一冊の本を必要としますので、ここではそれをしません。

しかし、一点だけエモーショナルな事例を述べて、この節を終えたいと思います。それはあるテニスプレーヤーの話です。七〇年代から八〇年代前半にかけて活躍したスウェーデン人のプロ・テニスプレーヤーで、ピヨン・ボルグという選手がいました。名選手で数々の優勝を重ね、巨額の賞金を獲得しました。現役でプレイをしている頃、スウェーデンの所得税

2018年度 学士入学試験 問題
小論文(社会科学に関する基礎を問う)

早稲田大学社会科学部

率が高過ぎるとして、節税のために税率の非常に低いモナコに住居を移しました。しかし、現役引退後しばらくしてから、再び母国のスウェーデンに戻ったのです。その理由は、確かにスウェーデンは税や社会保険料の負担は重いですが、恵まれた社会保障制度は老後の生活に安心感があるので、自分はそれを求めてスウェーデンに住む、というものでした。この逸話をどう評価するのか、それは人によって異なると予想しますが、海外逃避する日本人の富裕者の答えも聞いてみたいものです。

(橋木俊詔『格差社会 何が問題か』(岩波書店、2006年)より。)

設問1 上の文章で述べられている、日本において富裕者に起きている新しい動きを、簡潔に要約してください。

設問2 あなたは、上の文章で述べられたビヨン・ボルグの逸話をどう評価しますか。「格差社会」との関係も念頭に置いて、あなたの評価を述べてください。

次の英文は、Paul Krugman, "The Age of Diminished Expectations, U.S. Economic Policy in the 1990s", Third Edition, MIT Press, 1999 からの引用である。これに関連して以下の設問にしたがって解答用紙に論述せよ。

How could we raise our consumption per capita? As a matter of pure arithmetic, there are only three ways:

- (i) We could increase our productivity so that each worker produces more.
- (ii) We could put a larger portion of the population to work.
- (iii) We could put a smaller fraction of our output aside as investment for the future and devote more of our productive capacity to manufacturing goods for current consumption.

※Web公開にあたり、著作権者の要請により出典追記しております。
Krugman, Paul., The Age of Diminished Expectations, third edition, p. 12, © 1997 Massachusetts Institute of Technology, by permission of The MIT Press.

設問 1

上の文章で、著者は一人当たりの消費水準を増加するには、生産性（すなわち労働者一人当りの生産水準）を引き上げるか、人口に占める労働人口の比率を引き上げるか、将来への投資を引き下げ、今現在の消費のために生産を振り向けるか、これら3つのみであることが簡単な計算からわかると述べている。簡単な計算とは具体的にどのようなものを式で示しながら著者の主張を説明しなさい。

設問 2

今後の経済成長のためには女性労働力の活用が重要であると言われている。日本の現状を踏まえて、女性就業率の増加がそのような目的にどの程度有効であるのか、またその目的のために女性就業率を増加させる有効な手段があるのかどうかについて、見解を述べなさい。

受験番号					
氏名					

採点欄

早稲田大学社会科学部

問題 Ⅰ Ⅱ (問題Ⅱを選択した場合は、右の欄に○を必ず記入すること)

--

設問 1

設問 2